

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A Room without a View : From My Florentine Hours

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 信一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/538

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



眺めのない部屋

A Room without a View—From My Florentine Hours

村上 信一郎

To begin with, a title suggesting “Italian hours” provides a more complex orientation than at first might be expected. There is a long tradition of various “hours,” the matin and vesper prayers of old Catholic ritual, the secular or sacred of fourteenth- and fifteenth-century illuminated manuscripts, and even James’s own *English Hours* of 1905. And yet the experienced nineteenth-century traveler would have associated this title with at least on more persistent, and often troubling, tradition. As early as 1815, guidebooks to Italy supplied a “Table of Italian Hours” for those who normally would be disoriented by the fact that the “manner of reckoning time in some parts of Italy is peculiar to themselves.” (John Auchard, “Introduction,” Henry James, *Italian Hours*, New York, Penguin Books, 1992, p.X).

「あの女将^{おかみ}ときたらひどいわ」とミス・バートレットは言った。「ほんとうにひどいわ。南向きの眺めのいい部屋で隣どうしの部屋だったはずでしょ。それが北向きの部屋だなんて。北向きで見えるのは中庭だけよ。しかも二人の部屋は離ればなれときている。どう思う！ルーシー」。「おまけにコックニー！」とルーシーも声をあげた。この宿の女将があるうことかロンドンの下町訛りの英語でまくしたてたせいで、ルーシーはうんざりしてしまっていたのである。「これじゃまるでロンドンにいるのと一緒じゃない」。

イギリスの作家 E. M. フォスターが1908年に上梓した小説『眺めのいい部屋』は、こんな場面から始まる。エドガー・モーガン・フォスターは1879年にロンドンで生まれ1970年に亡くなった。大英帝国が栄華をきわめたヴィクトリア朝の末期に青春時代を過ごし、2つの大戦を経て、英国が欧州の病人と揶揄される時代に、90年を越える長い生涯の幕を閉じた。幼くして父を亡くすが、裕福な大叔母の庇護とその莫大な財産の遺贈により何一つ不自由のない人生を送ることができた。こうしてブルジョワ中流階級の子弟にはお決まりの進路であるパブリック・スクールのトンブリッジ校をへてケンブリッジ大学のキングズ・コレッジに入学、古典学と歴史学を学んだ。その卒業旅行とでもいえるものが、1901年からのほぼ1年にも及ぶイタリアとギリシャへの旅行であった。

イギリスには18世紀の半ばごろから、貴族の子弟が欧州大陸に渡り、少なくとも1年、ときには5年以上もかけて馬車でフランスやイタリアの各都市を遍歴しながら、古代文明やルネサンス芸術の精華に触れることで教養を深めるとともに、洗練された宮廷文化や社交術ひいては語学の習得まで図ろうとするグランド・ツアーの伝統があった。いうまでもなくフォスターのそれを文字通りのグランド・ツアーと呼ぶことはもはや不可能であった。ときは20世紀となり、主要な交通手段も馬車から鉄道に変わって、すでに貴族のみならずブルジョワ中流階級の子弟や女性にまで許された、ガイドブックを携えての安逸な観光旅行となっていた。しかも、フォスターは22歳にもなるというのに、母親を伴って一年ものあいだ卒業旅行を続けていたのである。母親同伴のグランド・ツアー！

ところで、1786年9月3日、突如イタリアに出奔したゲーテは、逗留先のナポリから「私は生まれ変わって帰るのでなければ、むしろこれきり帰らない方がよほどました」と友人に認めていたそうである。おそらくフォスターにはこんな気負いなどこれっぽっちもなかったように思われる。「僕はこの

主義というやつが大嫌いだ。国を裏切るか友を裏切るかと迫られれば、国を裏切る勇気をもちたいと思う」とか「民主主義には二度万歳をしよう。一度というのは民主主義だと何でもありだから。二度というのは民主主義だと文句がいえるから。でも二度で十分。万歳三唱の必要などない」と言っていた皮肉屋の彼のことだ。きっとゲーテほどの期待もなかったであろう。だがもしイタリアとの出会いがなければ作家フォースターの誕生もなかったことだけはまちがいない。その意味では彼にとってまさしくこの旅行はグラント・ツアーと呼ぶにふさわしいものであった。

彼が母親を伴ってフィレンツェにやってきたのは、1901年の秋のことである。ケンブリッジの友人宛の手紙では、10月31日からアルノ河畔ルンガルノ・デッレ・グラツィエ2番地のペンシオーネ・シーミに宿を移すと告げている。彼の母がアルノ川とその南岸の景色が一望できる部屋にこだわったからである。しかも、このペンシオーネはコックニーすなわちロンドンの下町出身のイギリス人女性によって経営されていた。大英帝国の通貨であるポンド高、いいかえるとイタリアの通貨であるリラ安のおかげもあって、イギリス人が好んで旅先とした当時のフィレンツェには、すでにイギリス人のコミュニティが成立していた。1861年にこの地で客死した女流詩人エリザベス・バレット・ブラウニングの墓があることでも知られているイギリス人墓地（正確には1827年に開設された新教徒と正教徒のための外国人墓地）、さらにはプロテスタント諸宗派の教会まで存在していた。そしてブラウニング夫人の召使であったエリザベス・ウィルソンがそうであったように、この地に暮らしたイギリス人の召使いのなかから、年季が明けると、イギリス人観光客相手のペンシオーネを経営するようになるものも数多く現れてきた。こうしたイギリス人女将おかみの一人にフォースター親子も出会ったというわけである。

『眺めのいい部屋』は1986年にジェイムズ・アイヴォリー監督により映画化された。だがこのときすでにペンシオーネ・シーミは存在せず、映画の撮影はアルノ川の少し下流に位置する、今ではオテル・デリ・オラフィという

名をもつ四ツ星ホテルに変身したペンシオーネで行われた。このペンシオーネは、ウフィッツィ美術館とポンテ・ヴェッキオを結ぶアルノ川右岸のヴァザーリの廻廊に沿ったルンガルノ・デリ・アルキブジエーリの通り（アルキブジエーリとは火縄銃商の謂）に建つパラッツォ・デ・ジローラミと称するルネサンス様式の建物の一角を占めていた。南向きの部屋からはアルノ川を眼下に見下ろすことができるばかりか、フォルテ・ベルヴェデーレの砦や小高い丘の上に建つサン・ミニアート・アル・モンテの教会も見はるかすことができる。文字通り「眺めのいい部屋」であった。

パラッツォ・デ・ジローラミ（ジローラミ家の館）は1495年に建てられた。ジローラミ家は、まだローマ帝国の支配下にあったフィレンツェで初代司教となる聖ゼノビウス（イタリア語では聖ゼノービオあるいは聖ザノービ、伝承によれば紀元417年没）を祖先に持つとするフィレンツェ最古の家系を誇る一族であった。ポンテ・ヴェッキオのすぐ北側にあるサント・ステーファノ・アル・ポンテ教会の教区がジローラミ家の縄張りであった。現在のランベルテスカ通（旧カント・デ・ジローラミ）とポル・サンタ・マリア通の角に12世紀に建てられたジローラミ家の塔の隣には聖ゼノビウスが暮らしたとされる木造の家（カーサ・ディ・サント・ザノービ）が幾多の災禍をくぐり抜け、18世紀においてもなお保存されていたという。もっともフィレンツェ国立文書館に残るジローラミ家の財産目録によれば、せっかくの聖地も実際には借家として貸し出されていたようだ。だがそれもジローラミ家が聖人に由来する家系を誇りとしつつも金融業を生業としていたことからすれば、十分にありうることとはいえたのだが。

ジローラミ家は聖ゼノビウスが嵌めていたとされる黄金の司教指輪を代々家宝としてきた。そしてこの指輪には奇蹟的治癒力（タウマトゥルジア）があると信じられてきた。それを知ったフランス王ルイ十一世は自らの病を治すために、昵懇の間柄にあるフィレンツェの時の支配者ロレンツォ・デ・メディ

チの威光を利用することにより、ジローラミ家に対してこの貴重な聖遺物をしばし貸与するよう申し入れたのである。家宝の略取を恐れたジローラミ家は偽物の指輪を送るなどしてお茶を濁そうとした。だがついに聖ゼノビウスの指輪は1482年12月ジローラミ家の嫡男ベルナルドの手によって直接ルイ十一世の宮廷にまで届けられることになった。ところがその甲斐もなく国王は翌1483年8月31日に脳卒中を起こして死んでしまったのである。

これには後日談がある。ベルナルド・デ・ジローラミは病床にあったフランス国王から謝礼として何がしかの金子きんすと15ポンドもの重量をもつ黄金製の聖遺物箱（指輪保存箱）を授かっていた。そして国王の死から6か月後、ジローラミ家の家長フランチェスコのすでに亡くなった弟フィリップの遺児たちにより、この聖遺物箱の共有財産権の確認を求める訴訟が起こされる。当初この訴訟は原告側に圧倒的に不利だと考えられていた。ところが原告側代理人がフランチェスコに対して聖遺物箱の現物を法廷に提示することを要求してから状況は一変する。それは、フランチェスコがすでに黄金製の聖遺物箱を鋳溶かしてしまったのではないが、という風評の確認を求めることを意味したからである。

そして訴訟から二年以上が過ぎた1486年9月27日、結局はフランチェスコ側が敗訴した。そして聖遺物箱の実勢価格をも遥かに上回る法外な預託金を4か月以内にメディチ銀行に納付するよう命じられた。それはロレンツォ・デ・メディチがお抱え彫金師に新たな聖遺物箱の制作を委嘱するための費用とされていた。だがそれが実行に移されることはなかった。そして1492年にはロレンツォ・イル・マニフィコがドメニコ会修道士サヴォナローラに看取られながら罪を告白して死ぬ。2年後の1494年にはフランス王シャルル八世のイタリア侵攻に右往左往したメディチ家が追放され、フィレンツェに共和政が復活する。そのようななか1495年にフランチェスコ・デ・ジローラミは典雅な柱廊を最上階に設えた宮殿をアルノ河畔に新築したのである。ルイ十一世から下賜された黄金製の聖遺物箱がその原資だといわれているが証拠は

ない。それが^{くだん}件のパラッツォ・デ・ジローラミである。

この建物の一室の賃貸契約書に私がサインをしたのは2005年4月6日のことであった。家主はジョヴァンナ・ピアンキ夫人。1925年10月18日の生まれだから当時は79歳、私の亡き母と同年。生粋のフィレンティーナである。まだ細身の彼女には花柄のブラウスとパンツルックがとてもよく似合う。また独身ではあるが、近所に暮らす幼なじみで寡夫の弁護士ジャンピエーロさんが若い恋人同士のようにいつもそばに寄り添っている。

この賃貸契約の仲介者は中世後期フィレンツェにおいて隆盛を極めたアルテ・デッラ・ラーナ（毛織物組合）研究の第一人者である星野秀利ボローニャ大学教授の未亡人で、今もフィレンツェに暮らす陽子夫人であった。1308年に建てられたアルテ・デッラ・ラーナの建物のそばを通るたびに、西洋経済史の泰斗であった大塚久雄教授の愛弟子であり、東京の大学に職を得ながらも1962年33歳でイタリア政府給費留学生となって以来一度も帰国することなく、1991年61歳にしてこの地で土に還った先生のことを思い出す。当時は先生が通ったフィレンツェ国立文書館もまだウフィッツィ美術館と同じ建物のなかにあった。清貧の学究生活の中でフランス煙草ゴロワーズと蒸留酒グラッパとワグナーの楽劇を何よりも愛した北海道生まれの先生が江田島の海軍兵学校に入学していたことを知ったのは、その死後のことである。先生にとって学問とは、ヴェーバーの『職業としての学問』がいうがごとく修士への召命（ベルーフ）と同じ意味における職業であった。

マリア・グラツィア・マルテッリ・ピアンキ（フィレンツェ 1899—1984年）。ピアンキ夫人の母親の名前である。彼女の母親は画家であった。その展覧会カタログが私への最初の贈物となった。それによると毛皮商を営む富裕な商人ブルジョワジーの家庭に生まれ、自らも絵筆をとる母親から人文主義教育とともに絵画と音楽の手ほどきを受ける。そして、その頃一世を風靡しはじめた未来派前衛芸術とは無縁であったものの、さりとして美術学校が教

える伝統的で古風な均整美にはあきたらなくて、内面的情動の表現に優れた才能を発揮したエウジェニオ・キオストリという画家に師事し、画業の研鑽に努めた。そして1920年のフィレンツェ春季展に入賞して以来ローマ・ピエンナーレやヴェネツィア・ピエンナーレに出展を続けた。だがそれも1928年で終わる。ひとつにはセザンヌ風の通俗的な作品を描くようになった師から距離をおくようになったからである。もうひとつには、ヴェネツィアの富裕なユダヤ人家庭に生まれながら社会主義思想に惹かれ、人妻でありながらムッソリーニの愛人の一人となることで美術評論家として一世を風靡したマルゲリータ・サルファッティが音頭取りをした「秩序への回帰」を唱える芸術運動「ノヴェチェント（20世紀）」に対しても、体制芸術の胡散臭さを感じるようになっていたからである。まちがいでなく、それには夫のグイドが反ファシストであったことも影響を及ぼしていた。それ以降の作品の多くはフィレンツェや別荘があったアドリア海の避暑地チェゼナーティコの風景を描いたものとなる。静謐でどこか物憂い風景画ばかりである。

マリア・グラツィア、すなわちピアンキ夫人の母親から3代前に遡る彼女の曾祖父アントーニオ・カルヴェッリがパラッツォ・デ・ジローラミを購入したのは、1700年代後半のことだという。ジローラミ家は1786年にピエーロ・ディ・ザノービが亡くなることで断絶する。そしてその財産はフィレンツェの由緒正しい名門貴族コヴォーニ家に遺贈された。しかしカルヴェッリ家がどのような経緯でこの由緒ある建物を購入するに至ったのかは詳らかではない。ただこのときすでに毛皮商として財を成していたことは確かなようである。

フィレンツェは1569年にコジモ・デ・メディチが教皇ピウス五世からトスカーナ大公の称号を得て以来トスカーナ大公国（グランドゥカート・ディ・トスカーナ）と称するようになっていた。そして1737年にメディチ家が断絶するとオーストリア・ハプスブルク家のマリア・テレジアの夫となるロートリンゲン（ロレーヌ）公フランツ三世がトスカーナ大公の地位を継承した。だが彼のフィレンツェ訪問は1739年の一度だけである。しかも1745年からは

神聖ローマ皇帝フランツ一世となる。オーストリア継承戦争が1748年まで8年間も続いたこともあり大公国の統治は摂政に委ねられたままとなった。

ところが1765年に彼が亡くなると、マリア・テレジアとフランツ一世がもうけた16人の子供の9番目で次男にあたるペーター・レオポルトが弱冠18歳でトスカーナ大公に即位し、この地で暮らすことになる。啓蒙的専制君主としての名声をほしいままにした大公レオポルトの誕生である。持ち前の旺盛な読書欲からライプニッツ、ロレーヌのカトリック改革派、モンテスキュー、百科全書派、ヴォルテール、ルソー、チュルゴー、デュボン・ド・ヌムールに至るまで読破した稀代の啓蒙主義者にして才気溢れる改革者であった。今でもウフィッツィ美術館の一角には1753年に創設されたアカデミア・デイ・ジェオルゴフィリ（農芸学会）の本部がある。これがトスカーナ大公国における重農主義（フィジオクラツィア）にもとづく諸改革の有力な推進母体となった。農業技術の改良や沼沢地の干拓を奨励するとともに、食糧管理制度の廃止と穀物輸出の自由化を唱えたのである。こうして1775年には穀物輸出が自由化される。また1779年には同業組合（ギルド）が廃止されて職業選択の自由が確立した。先述したアルテ・デッラ・ラーナ（毛織物組合）もこの年になくなった。1768年からは徴税請負制度や免税諸特権の廃止と税制の統一が図られ国有地の売却による公債の償還も始まった。それまではギルド管轄下にある14の裁判所以外に30もの司法機関が競合していた司法制度の統合と権限の限定も図られた。

そればかりか1769年からは大公の母国であるオーストリアの改革派カトリシズムの影響を受けた国権優位論（ジュリズディツィオナリズム）にもとづく新たな教会政策が実施された。宗教団体や慈善団体による土地の永代所有を認める死手（マノモルタ）が廃止され、宗教活動に対する国家認証制（エクセクワトゥル）が導入された。また宗教団体の庇護権（アジーロ）や教会裁判権も制限され修道院が廃止された。さらに1786年にはピストイア及びプラートの司教であったシピオーネ・リッチのもとでピストイア教会会議（シノド・

ディ・ピストイア)が開催され、ローマ教皇やイエズス会を激しく攻撃していたジャンセニズムの立場にもとづく教会改革を実現しようとした。

ジャンセニズムは、オランダの神学教授コルネリス・ヤンセンの著書『アウグスチヌス』がその死後1640年に出版されたことを契機として、カトリック諸国を席卷した宗教思想である。パスカルが『田舎の友への手紙』(1656-57年)によってイエズス会の道德問題に対する詭弁的で情状酌量的な決疑論(カズイスティカ)を鋭く難詰したように、ジャンセニストは人間の自由意志(リベルウム・アルビトリウム)にもとづく告解や悔悛による救済の可能性を全否定し、アウグスチヌスの教えに依拠して神の恩寵(グラティア)による救済の予定(プラエデスティナティオ)の絶対性を主張していた。それゆえ教会における道德規律の弛緩や儀式の偏重を戒めたばかりか、偶像崇拜や迷信の横行を強く批判した。

ピストイア教会会議では、とりわけキリストの心臓を帰依の対象とする「聖心」(サクレ・クール)信仰をキリストの神性を否定するものとして拒絶した。さらには、土着的な信仰として各地の民衆のあいだに広まっていた「お告げの聖母」(アンヌンツィアータ)や「嘆きの聖母」(アッドロラータ)といった多様な称号と各種の超自然的効能を持つ複数の聖母マリアに対する信仰や、遺骨などの聖遺物崇拜と混淆した数多くの聖人に対する信仰も、迷信として退けた。そればかりか、すべての教会に対して一つの祭壇しか認めないとし、キリストの神秘(ミステリー)とは本来何の縁もない種々雑多な聖像画や聖像の教会からの撤去を求めた。いわば一教会一聖人ないし一教会一聖母という原則の確立によって信仰の合理化を図ろうとしたのである。

だがこうした教会改革の試みはすぐに挫折する。ひとつには大公レオポルドが1790年に兄のヨーゼフ二世の死により神聖ローマ皇帝となるために帰国したからである。それだけではなく各地の司教が教会会議の決定に反対し、聖母信仰の合理化に反発する民衆騒擾が起こり、それはリッチ司教のお膝元のピストイアやプラートからフィレンツェにまで拡大した。こうして1791年

リッチ司教は辞任を余儀なくされる。それに追い討ちをかけるように教皇ピウス六世が1794年には教会会議による85か条の決定を非難するとともに、そのうちの7か条が異端にあたるとの教書を公にする。リッチも1805年に結局は自説の撤回を余儀なくされる。

それはさておき大公レオポルドの事績のなかで特筆に価するのは、1786年のトスカーナ刑法典の改革によって世界で最初に死刑の廃止を法制化したことである。いうまでもなく、これはオーストリア領ロンバルディアのミラノで活躍し1764年の著書『犯罪と刑罰』によってその名声を不滅のものとした当代屈指の啓蒙思想家であるチェーザレ・ベッカリアの助言を容れたことにより、実現したものであった。「ある事情の下で人が人でなくなり物となるのが法律によって許される度に、もうそこには自由はなくなる」（同書第27章）としたベッカリアの説く最先端の啓蒙思想が、トスカーナ大公国において見事開花したのである。その後のトスカーナ大公国は、ナポレオンのイタリア征服により1801年に一旦廃嫡となったが、1814年に再興される。だが1860年の住民投票によってサルデーニャ王国への併合が決まる（有権者は53万4000人で投票総数38万6445票のうち賛成は36万6571票であった）。翌1861年にはイタリア王国が誕生した。そればかりではない。フィレンツェは1865年から1870年までのあいだ、そのイタリア王国の首都となったのである。

ところで、ピアンキ夫人の母親の曾祖父にあたるアントーニオ・カルヴェッリがパラッツォ・デ・ジローラミを購入したのは、まさにレオポルド大公の時代においてのことであった。カルヴェッリ家はトスカーナ大公から勅許状を得てロシアから毛皮を輸入し、その建物の最上階において毛皮の加工縫製を行う毛皮商であった。ヴァザーリの廻廊（コルリドイオ・ヴァザリアーノ）は、コジモ一世の命令でメディチ家の私用のために1565年に造られたパラッツォ・ヴェッキオとパラッツォ・ピッティを結ぶ全長1キロメートルほどの廻廊である。その階下のロッジャート・デリ・アルキブジエーリは爾来何世紀にもわたり銃砲店等が立ち並ぶ商店街となっていた。カルヴェッリ家は

1827年そこに毛皮の直売店を開業する。フィレンツェをイタリア王国の首都にするための都市改造で1864年にその商店街が閉鎖されると、今度はパラッツォ・デ・ジローラミの1階に大きな店舗を構えた。貴顕紳士淑女の馬車が列をなすフィレンツェ随一の高級毛皮店として高い名声を博したという。

ジローラミ家の紋章が残る正門の上方にベランダが見えるピアンキ夫人のアパルタメント（専用住居部分）は日本でいう3階にあった。だがこの建物は各階の天井がきわめて高く階段の踊り場ごとにメZZານイーノ（中階）と呼ばれる小部屋が設えられていた。私は2階と3階のあいだの中3階ともいうべきメZZານイーノの借家人となったのである。ここにはついこのあいだまでお抱え料理人が暮らしていたという。とはいえ、すでに改装が施された70平米ほどの簡素だが快適なシングル・ルームである。だが北向きの部屋であった。アルノ川と反対側のしばしば映画の撮影の舞台ともなる中世の面影を残した昼なお薄暗き裏小路に面しており（おまけに、かつてその路地にはヴェスパジアーノつまり男子公衆便所まであった）、窓を開けてもサント・ステファノ・アル・ポンテ教会に連なる家々の赤い瓦屋根と、そこに生える雑草を啄ばむ鳩や小鳥たちの姿しか見ることができなかった。あえていうならば修道士たちの暮らす独居坊のような感じがした。そのようなわけで、私はこの部屋のことを密かに「眺めない部屋」と呼んでいたのである。

「自分たちの暖かな家で安心して暮らしているあなたたち。夕方になって家に帰ればそこには暖かい食事と親しい人たちの顔が待っているあなたたち。これでも人間かと考えてみてください。泥まみれになって働き平和を知らずパンのかけらをめぐって争い瞬く間に死んでしまう（…）とくと考えてみてほしいのです。こんなことがあったということを。心に刻んでおいてほしいのです。家にいるときも道を歩いているときも。寝ても醒めても。あなたの子供たちにも繰り返し話してやってほしいのです。さもないとあなたの家

は壊れ病があなたを蝕み子供たちはあなたから顔を背けることになるにちがいない」（プリモ・レーヴィ『これでも人間か』）。

ピアンキ夫人が、おずおずと初めて私に手渡してくれたのは、ユダヤ人作家プリモ・レーヴィが1978年に書いた短い詩のコピーであった。原爆の熱線によって壁に焼きつけられた影以外に何も残るものがない広島少女の事を描いた詩である。レーヴィがアウシュヴィッツ収容所から解放され故郷のトリノの家に帰りついたのは、1945年1月27日のことであったという。そこでただちに書き始めたのが『これでも人間か』（邦題『アウシュヴィッツは終わらない』）である。今やヴィクトル・フランクルの『夜と霧』やエリ・ヴィーゼルの『夜』と並ぶ古典となっている。だが彼は1987年4月11日トリノのレ・ウンベルト通75番地の自宅から飛び降り自殺をしてしまう。なぜ。「我々生存者は真の証人とはいえない。我々生存者はほんの少数者であるだけばかりかまともとはいえない少数者でもある。我々は裏切りや才覚や幸運のお陰でどん底にまで行かなくてすんだ。どん底にまで行ってゴルゴン三姉妹の顔[その醜い顔を見た者は石になるとギリシャ神話ではいう]を見た人々は帰ってこなかったし帰ってきてても何も語らなかった」（『溺れるものと救われるもの』1986年）。ここに、その理由のすべてが言い尽くされているように思われてならない。思えば私の父も彼と同じ1919年の生まれであった。

私の読書感想文に対する回答としてピアンキ夫人が次に手渡してくれたのは1959年にノーベル文学賞を受賞したギリシャ人の祖母を持つシチリア生まれの詩人サルヴァトーレ・クワジモドの詩「我が時代の人間」であった。1947年の詩集『明けても暮れても』の最後におかれた詩である。すでにそこには1942年の詩集『そしてすぐに日は暮れる（エデ・スピト・セーラ）』、例えば「だれもが大地の真ん中にたったひとりである。太陽の光に突き刺されながら。そしてすぐに日は暮れる」に見られるような大理石のごとき硬質の

抒情をたたえたエルメティズモはない。そこに描かれているのは時代が変われども人類が石器時代以来愚かにも繰り返す陰惨な殺戮の情景に対する呪詛の言葉だけだ。

いずれにせよ、こうして私たちの文通は、ピアンキ夫人による詩歌教室へと変貌していった。彼女の家はリベルティ様式の家具調度品でしつらえられていた。スティレ・リベルティ、すなわちアール・ヌーヴォーのことである。1890年代から1920年代にかけてイタリアではロンドンのリバティ商会のインテリア商品が大流行する。それがイタリア語風に訛ってリベルティ様式と呼ばれるようになった。そのサロンはというと、まさに眺めのいい部屋だ。ベランダに立てばアルノ川もサン・ミニアート・アル・モンテ教会も見える。そして左手にはポンテ・ヴェッキオも眼下にある。サロンの隣に続く寝室の天井には円蓋（クーポラ）が穿たれている。ジローラミ家の礼拝堂の名残だという。

ところで彼女のサロンには3種類の机があった。ひとつは事務机。ここで家賃を現金で支払う。もうひとつは応接机。そしてもうひとつが読書机。窓辺に置かれた少し高さのある小ぶりの机である。ピアンキ夫人の詩歌教室はこの文机で行われた。2人並んで椅子に腰掛け、今度はジェノヴァの生まれで1975年にノーベル文学賞を受賞した詩人エウジェーニオ・モンターレの若き日の詩「烏賊の骨」（オッシ・ディ・セツピア）を、小学生よろしく先生の後についてたどたどしく読んでいく。

「……梢のあいだからずっと遠くの海が鱗のようにきらめくのを眺めている。するとはげ山の頂から蝉がぎこちなく鳴きはじめる。そして眩しい太陽のなかを歩いていく。はたと悲しい驚きとともに感じるのだ。生きることのすべてやそのむずかしさを。こんなふうにして尖った塚のかけらを埋め込んだ石塀をたどっていく」。

砂浜ではなく、岩礁の多いリヴィエラ海岸の真夏の海が、目に浮かぶよう

である。

1944年の夏は、雨が一滴も降らず焼けつくような猛暑が続いたという。そうした炎熱地獄のなかの8月3日午後3時、イタリアを占領するドイツ軍総司令官アルベルト・ケッセルリンク元帥はフィレンツェに対して戒厳令を布告する。水や食糧の補給をも含む一切の外出が禁止された。これを無視して外出する者のみならず、窓から顔を出すだけでも狙撃された。6月4日にローマは解放され、英国、オランダ、南アフリカからなる連合軍はすでにフィレンツェの南端にまで迫っていた。だが、その進軍は慎重かつ緩慢であった。そのため、トスカーナ国民解放委員会はすでに市域の大半を制圧していたにもかかわらず、一斉蜂起を躊躇していた。

ドイツ軍は撤退にそなえて、日が暮れるとアルノ川にかかる橋に大量の爆薬を仕掛けた。そして爆薬は深夜から未明にかけて点火される。ポンテ・デッラ・ヴィットーリア、ポンテ・アッラ・カルライア、ポンテ・ア・サンタ・トリニタ、ポンテ・アッレ・グラツィエ。この四つの橋が爆破された。その爆風でポル・サンタ・マリア通やバルディ通やグイッチャルディーニ通やルンガルノ・アッチャイウォーリの建物さらにはトッレ・デリ・アディマリーヤロッジエ・デル・ポルチェッリーノの周辺に残る古い家々が崩壊した。唯一ポンテ・ヴェッキオだけが破壊を免れた。^{くだん}件のパラッツォ・デ・ジローラミも大破した。ダンテの時代の名残をとどめるフィレンツェの旧市街が、一夜にして瓦礫の山と化したのである。

連合軍部隊とパルチザン部隊は、8月4日、ドイツ軍が制圧していたアルノ左岸（オルタルノ）に陸続と突入していった。だが、そこに待ち受けていたのは年端もいかなないファシスト青少年からなる「狙撃兵」（チェッキーニ）であった。この「黒い旅団」（ブリガーテ・ネーレ）を組織したのは、1943年12月1日にドイツ軍の庇護下ガルダ湖畔のサロに建国されたイタリア社会共和国のファシスト党書記長アレッサンドロ・パヴォリーニである。彼はフィレンツェの富裕な言語学者の家庭に生まれた。フィレンツェ大学法学部とロー

マ大学社会科学部を同時に卒業した学士であり、文筆を能くする文人でもあった。実際、1926年にアルベルト・カロッチがフィレンツェで創刊し詩人モンターレらも加わった文芸雑誌『ソラリア』にも寄稿しつづけた。そればかりか、ファシスト党员ではないモンターレを1812年に創立された由緒ある文化財団ガビネット・ヴェッシューの館長に推薦することさえした。その一方で、1929年弱冠26歳にしてファシスト党フィレンツェ県連盟書記長に任命されて以来（今も続くフィレンツェ五月音楽祭はその年に彼が始めた）、「高官」（ジェラルカ）として権力の中枢を上りつめて10年後には国民文化大臣にまでなり、最後にはムッソリーニとともにスイスへと逃亡するなかパルチザンによって捕まえられて、1945年4月28日にドンゴで銃殺されるという、確信的なまでの武闘派でもあった。

狙撃兵は建物の屋上に潜んで、パルチザンや連合軍の兵士のみならず市民をも無差別に狙撃した。そのためもあり、またロベルト・ロッセリーニ監督による1946年のネオリアリズモの映画『パイサ』（同郷人を意味する。邦題は『戦火のかなた』）にも描かれているように、4つの橋が破壊され、ポンテ・ヴェッキオも破壊を免れたものの瓦礫のために通れなくなったこともあって、反ファシスト諸勢力はヴァザーリの廻廊を密かに利用することで、アルノ川兩岸のあいだの連絡を取り合ったといわれている。

8月11日午前6時45分、パラッツォ・ヴェッキオの半鐘（マルティネッラ）が打ち鳴らされ、市民に対して一斉蜂起が呼びかけられた。そしてその夜フィレンツェは解放された。もっとも、その郊外のフィエーゾレも解放されて、銃火が完全に消えるのは、9月2日を待たなければならなかった。

『ラ・レプブリカ』（共和国）というタブロイド版の日刊紙がエウジェニオ・スカルファリによってローマで創刊されたのは1976年のことである。イタリアではその百年前の1876年にミラノで創刊された『コリエレ・デッラ・セーラ』の方が一流紙としての定評をもつ。またフィレンツェには『ラ・ナ

ツイオーネ』(国民)という1859年に創刊された保守系有力紙もある。だがピアンキ夫人は『ラ・レプブリカ』の創刊以来の読者であることを誇りとしていた。だから毎朝散歩がてらに共和国広場のなじみの売店まで行って私がこの新聞を買っていると知り、とても喜んでくれた。これは、れっきとした中道左派系の新聞である。したがってピアンキ夫人は「左翼」(シニーストラ)を自認していたのである。「左翼」のブルジョワ夫人？

これまでピアンキ夫人(シニョーラ・ピアンキ)とってきたが、実は、未婚の独身女性である。一人娘がいたが早世し、今はサン・ミニアート・アル・モンテ教会の隣にある一族の墓所に眠っている。したがって未婚の母であった。また職業婦人(教員)でもあった。

彼女の恋人は、解放時に知り合った南アフリカ軍の英国人将校で英文学の教授だった。そして別れる。彼女は1950年にフィレンツェ大学文学部を卒業した。二〇世紀のイタリアを代表する考古学者で古代美術史家のラヌッチョ・ピアンキ・バンディネリ教授の下でエトルリア学を専攻したのである。一時期はシチリア島で遺跡の発掘に従事し、その後教員に転じたという。

ピアンキ・バンディネリ教授はシエナの名門貴族に生まれながらも、後にはマルクス主義者となる「赤い」貴族であった。1938年5月に総統ヒトラーがイタリアを公式訪問したときは、心ならずもムッソリーニによってローマの古代遺跡の案内役に任じられてしまう。そして、5月9日にヒトラーが初めてフィレンツェを訪れたときの案内役も教授であった。ヒトラーはポンテ・ヴェッキオからのアルノ川の眺めにいたく感動したという。それゆえに、この橋の爆破を思い止まらせたという説もあるぐらいだ。

しかし、彼女が子供心によく覚えているのは、独裁者たちがパレードをしたときに、父親がただ一軒だけベランダからハーケンクロイツ(鍵十字)ではなく、フィレンツェの赤い百合の紋章が描かれた垂れ幕を下ろしたことであったという。彼女の父グイド・ピアンキは祖父の代から続く貴金属回収精練業を営む裕福な独立自営業者であった。第一次大戦に愛国者として参戦し

たものの、オーストリア軍に捕らえられ、過酷な捕虜収容所体験をする。それもあってファシスト党に入党することなく、反ファシストとしての生涯を貫き通した。そして、ロッセッリ兄弟が亡命地のパリで1929年に創設した反ファシスト非合法運動「正義と自由」を継承して1942年7月に結成され、前大統領カルロ・アゼリオ・チャンピや政治哲学者ノルベルト・ボッピオ、また先述したモンターレなど数多くの知識人や文化人も加わった「行動党」に参加する。またトスカーナ国民解放委員会にも加わった。いずれにせよ、彼女が富裕なブルジョワ家庭に生まれながら左翼と自認するのは、彼女自身による人生の選択とともにピアンキ家の反ファシズムに由来するところが極めて大であったように思われる。

フィレンツェの守護聖人サン・ジョヴァンニ・バッティスタ（洗礼者ヨハネ）の祝日は6月24日である。この日を境として、フィレンツェでは夏休みが始まるといわれる。ピアンキ夫人もアドリア海の別荘に出かけてしまう。しばらく会えなくなるので、彼女にフィレンツェ生まれの女流作家ダーチャ・マライーニの『神戸行きの船——我が母の日本日記』を贈物とした。ダーチャは稀代の東洋学者となるフォスコを父に、シチリアのアツリアータ・ディ・サラパルータ公爵家出身の画家トパツィアを母に持ち、1938年2歳のときから家族とともに札幌や京都などで暮らした。しかし、1943年9月8日のイタリアの休戦宣言後ファシズムへの忠誠を拒否したため、一家は名古屋の収容所に収監されてしまう。そして終戦後になってやっと帰国する。ダーチャは作家アルベルト・モラヴィアの二度目の妻でありフェミニストとしても知られている。

そのお返しにとピアンキ夫人がくれたのが、ジョルジョ・ラ・ピーラの伝記であった。1904年にシチリアに生まれ、1951年から65年にかけてフィレンツェ市長を務め、1977年に亡くなったカトリック政治家である。若き日にはシチリア生まれの詩人クワジモドとも親交があり、ガブリエレ・ダヌンツィオの耽美主義にも傾倒した。だが20歳の復活祭の日に回心を体験して以来

「主の自由な使徒」としてキリストへの献身を誓う一方、フィレンツェ大学法学部でローマ法を学び、1934年には同講座の主任教授に就任する。

ラ・ピーラは、ファシスト体制の御用哲学者となったジョヴァンニ・ジェンティーレがヘーゲル哲学に依拠して唱えた「倫理国家」（スタート・エティコ）には、かねがね強烈な違和感を覚えていた。そして1938年7月15日の「人種宣言」を皮切りに、ナチズムに追随した一連の反ユダヤ人種法が制定されるに及んで、ファシスト体制との決裂は決定的となる。1939年には、トマス・アクィナスの哲学に基づいて人格（ペルソナ）の諸権利の擁護を説くとともに、ファシスト体制を公然と批判する雑誌『プリンチーピ』（諸原理）を創刊した。この雑誌は翌年発刊停止となり、彼も官憲の監視下におかれる。そして、1943年9月8日以降はキアンティからシエナを経てローマにまで逃亡し、解放後、フィレンツェに帰還した。

ラ・ピーラは、1946年6月2日の体制選択を問う国民投票と同時に実施された制憲議会選挙において議員に選ばれる。そして彼より9歳も年少で、ミラノ・カトリック大学を卒業した教会法学者でありながら、レジスタンス闘争に参加してレッジョ・エミーリア国民解放委員会委員長にまでになり、当時はキリスト教民主党政副幹事長を務めていたジュゼッペ・ドッセッティの周りに集まったアミントーレ・ファンファーニやアルド・モーロといった若いカトリック知識人とともに、イタリア共和国憲法の条文作成に多大な足跡を残すことになった。

憲法第1条「イタリアは労働に基礎をおく民主共和国である」には、教皇レオ十三世の1891年の回勅『レールム・ノワールム—労働者の状態について』に淵源するカトリック社会教義に依拠した、自由主義や資本主義に対する根源的な批判が投影されていた。また第2条「共和国は個人としてのまたその人格が発展する社会的形成体としての人間の不可侵の権利を認めかつ保障するとともに、政治的、経済的、社会的な連帯という破棄不可能な義務の遂行を要求する」には、フランスのカトリック思想家ジャック・マリタンやエマ

ニュエル・ムーニエが説く人格主義（ベルソナリスム）に共鳴するラ・ピーラの思想が色濃く反映されていた。イタリア共和国憲法は、国民解放委員会に参加した反ファシスト諸政党による妥協の産物であったが、原子化された利己的な個人を単位とする自由主義の人間観を社会連帯主義の立場から批判するという点において、カトリシズムとマルキシズムのあいだには奇妙な一致点があった。それを可能としたのは、レジスタンス体験の共有であり、ファシズムと妥協した戦前の自由主義国家（イタリア王国）に対する全面的な拒絶反応であった。

その後のラ・ピーラは「聖人市長」（シンダコ・サント）と呼ばれ、清貧の生活に徹して貧しい人々の救済に心血を注ぐ一方、冷戦下、ソ連、ヴェトナム、中国など共産圏諸国との対話の促進や紛争地域の和平活動に大きな足跡を残した。教皇ヨハネ・パウロ二世の下で、1986年には、聖人の前段階となる福者に列福するための手続きも開始された。だが、おそらくピアンキ夫人の眼にはラ・ピーラもカトリックでありながらも「左翼」の範疇に属する人物と映っているのであろう。

現在のポンテ・アッレ・グラツィエの橋はかつてポンテ・ア・ルバコンテと呼ばれた。橋のたもとにあった聖母マリアの祠が、数々の恩寵（グラツィエ）つまり奇跡をもたらしたことから、1371年にはポンテ・アッレ・グラツィエ（恩寵のある橋）と改称された。また、1347年に一人の女性信者が橋上で庵を編み隠遁生活を始めて以来、1873年に橋が改築されるまで六つあったそれぞれの橋脚の上に小庵が建てられていたという（そればかりか一時は靴の修理屋や古着屋まであったらしい）。彼女たちは「橋の女隠者」（ロミーテ・ディ・ポンテ）と呼ばれ、聖母への恩寵の執り成しをする霊能者として帰依を集めていく。いわばこの橋は、フィレンツェの神秘的な霊域を代表するようなものとなる。ピアンキ夫人が日曜日ごとにお祈りに通う、橋のそばの小さな礼拝堂オラトリオ・ディ・サンタ・マリア・デッレ・グラツィエで、彼

女の幼なじみのジャンピエーロさんから、そんなことを教えてもらった。

ピアンキ夫人から、ラ・ピーラの伝記という思いがけない贈物をいただいたことによって、長らく忘れていた30年も昔のローマ大学政治学部に留学していたころのことを、つい思い出してしまうことになった。そんな思い出のなかでも離婚法廃棄のための国民投票が実施された1974年5月12日は、私にとってもっとも重要な記憶に残る日付の一つとなった。

イタリア共産党書記長パルミーロ・トリアッティが制憲議会においてキリスト教民主党に妥協したことにより、1948年に施行されたイタリア共和国憲法第7条には「国家とカトリック教会は各々その固有の領域において独立し主権を有する。両者の関係はラテラーノ協定により定められる」と記されることになった。しかも、それにさかのぼる1929年2月11日にムッソリーニ政権とカトリック教皇庁との間に締結されたラテラーノ協定において、政教協約（コンコルダート）第34条は教会婚に民事婚としての効力を認めていた。そのために、教会法に従って秘跡（サクラメントゥム）とされた婚姻の「不解消性」が法的効力を有するという規定が戦後になっても存続していた。そうしたことから戦後のイタリア共和国になっても、離婚は法的に認められないという異常な状態が、ずっと続いていたのである。

しかし、1970年12月に社会党のロリス・フォルトゥーナと自由党のアントニオ・バスリーニが提案した離婚法が、やっとのことで成立する。これに猛反発をしたのが、カトリック教会とアミントーレ・ファンファーニ幹事長の率いるキリスト教民主党であった。そこに極右ネオ・ファシスト政党のイタリア社会運動（MSI）までもが加わり、総力をあげて離婚法廃棄のための国民投票に賛成票を投じるよう呼びかけたのである。しかし、投票率は87.7%に及んだものの、賛成40.7%、反対59.3%でカトリック教会側が敗北を喫した。いいかえると、そこまでイタリア社会の世俗化が進んでいたものであり、カトリック教徒の意識も大きく変化してははっきりと多様性と自律性を示すようになっていたのである。

ローマではコロソ通を折れてサンティニャーツィオ教会に向かう路地のようなモンテカティーニ通5番地の下宿屋に暮らしていた。1728年に建てられたバロック建築の5階である。パンテオンにもトレヴィの泉にも5分とかわからない。スイート・ルーム（続き部屋）の本当の意味を初めて知ったのもここでだ。隣人の部屋を通らないと自分の部屋に入れない。しかも隣人はいつも昼過ぎまで寝ている。その隣人がアルベルト・モラヴィアの原作でベルナルド・ベルトルッチ監督の『イル・コンフォルミスタ』（「体制順応者」、邦題『暗殺の森』）にも出ている男優であることを知ったのは、近所の映画館の画面でのことだ。

下宿人には、ドイツのチュービンゲン大学で美術史を学び、ローマのヘルツィアーナ図書館から奨学金を得てルネサンスの画家ピントゥルッキオを研究する同い年の女子学生もいた。ピントゥルッキオのフレスコ画を見るために、カンピドーリオの隣のサンタ・マリア・アラチェーリ教会までよく通ったものである。この下宿屋の一番大きく豪華な部屋には、アメリカ人の神学教授とドイツ人の考古学者が暮らしていた。二人とも、とても親切で温厚な紳士であった。ただ下宿の女主人がドアを開け放して掃除をしているときに、偶然、天蓋付きのダブルベッドを見てしまったときには正直驚いた。

たしかに、フェデリコ・フェリーニ監督の映画『ローマ』に魅せられたなど生意気なことをいって、せっかくイタリア文化会館の館長代理であったマリア・メウッチ女史が、ピサ高等師範学校という1810年にナポレオンによりフランスの高等師範学校の分校として創立されたイタリア随一の全寮制名門校に推薦してあげようというのに、それをわざわざ断って、ローマで暮らすことにこだわっただけのことはあったようである。

だが、そんなことよりももっと大切な思い出は、かつて同じ場所にロモロ・ムッリというキリスト教民主主義者が暮らしていたということである。ムッリは1870年にマルケ地方に生まれた司祭で、イタリアで初めてキリスト教民

主義の運動を起こした。彼が1899年から1905年にかけて、そうした運動を始めた由緒ある場所が、モンテカティーニ通五番地だったのである。私が暮らした頃にはまだ残っていた1階の印刷所で、彼らの機関誌『社会文化』や『イタリアの明日』が印刷されたという。しかし教皇ピウス十世から「近代主義者」(モデルニスタ)の嫌疑を受け、1909年にはついに破門されてしまう。教会にとっては、キリスト教民主主義もまだ邪悪な近代の誤謬の一つでしかなかったのである。

私の恩師のピエトロ・スコッポラ教授は、当時49歳の現代史家であり、カトリック近代主義やキリスト教民主主義の研究者であった。だから、いち早く教授に、私が偶然にしてムッリと同宿人となったということを報告した。今し思えば、運命の悪戯というには、あまりにも他愛のない私事^{わたくしごと}にすぎなかったのだが。ときあたかも教授は「離婚法廃棄のための国民投票に反対票を投じる委員会」での活動に全力を傾注していた。カトリック界の少数派として、急進党や自由党や共和党などの世俗諸政党、あるいは共産党や社会党や社会民主党といった左翼諸政党とともに、離婚法の成立を要求して敢然と立ち上がったのである。ちなみに、先述したラ・ピーラは、もちろん教会の側に立っていた。スコッポラ教授のカトリック少数派としての意思表示は、国民投票の帰趨に決定的な影響を及ぼしたといわれている。

スコッポラ教授の師アルトゥーロ・カルロ・イエーモロは、1891年生まれのローマ大学法学部教授で、自由主義の立場にたつ教会法と教会史の権威であった。哲学者ベネデット・クローチェが、1925年に提唱した反ファシスト知識人宣言にも署名した筋金入りの自由主義者であった。イタリア王国建国の父カミッロ・ベンソ・カヴール伯爵は、1861年に「自由な国家のなかの自由な教会」(リーベラ・キエーザ・イン・リーベロ・スタート)という自由主義的な政教分離原則を唱えた。イエーモロは教会に対する国家の優越を強調する国権優位主義者(ジュリズディツィオナリスタ)ではあったが、基本的にはカヴールの原則に則って国家・教会関係を法制度的に整えていくな

ば、自由主義とカトリシズムの両立は可能と考える自由主義カトリシズムの信奉者でもあった。

しかし、スコッポラ教授はファシスト国家とカトリック教会が「和解」（コンチリアツィオーネ）をとげたラテラーノ協定によって、こうした立場は破綻したと考えた。権威主義的なエリート主導の国家・教会間の法制度的な「和解」だけでは、一般のカトリック教徒に何の「知的道徳的革新」（グラムシ）ももたらさなかったと考えたのである。こうして教授は、一般のカトリック教徒が、時代の変化の中でいかにして内在的な自己革新を遂げ行くのかという、カトリック運動の歴史に着目するようになっていく。宗教の領域においてはいかに教会に忠実なカトリック教徒といえども、市民として民主主義社会に生きる限りは、政治の領域において自律性を強め多様性を帯びざるをえなくなる。それはカトリック教徒が市民として成熟すること、すなわち大人になることを意味する。教授はこうした啓蒙的な民主主義のカトリシズムの可能性を心より信じていた。そして、それを自らの生き方を通して実践したのである。

当時の私には教授の企てがそれほどまでに大きな歴史的射程を持つものだと理解できなかった。教授が、あんなにも嫌っていたキリスト教民主党の革新にこだわり続けていることを、生意気にもなじったことさえある。25年後に再会を果たした折に、そのときの非礼を詫びたところ、ルカによる福音書の「放蕩息子」の喩えをあげながら、教授が破顔一笑して私を迎え入れてくれたことを、今でもよく思い出す。

2007年10月14日、イタリアにも教授が悲願としてきた民主党が誕生した。戦後政治においてかつては不倶戴天の敵同士であったイタリア共産党を継承する左翼民主派とキリスト教民主党左派を源流の一つとする「民主主義は自由である」派（通称マルゲリータ）の合同が成立し、単一政党としての民主党が結成された。そのほぼ10日後の10月25日、スコッポラ教授は81年の生涯の幕を閉じた。その感慨はいかばかりであったろうか。今は知る由もない。

Acknowledgements

My greatest debt of thanks is to Signora Giovanna Bianchi that is one of principal focuses of this essay. She cooperated with a spirit of great generosity, giving me her time and the fruit of her experience, as well as her family's historic and intimate information. I would also like to thank her best friend Avvocato Giampiero Giovannini for offering me his precious knowledge about the mystic history of the Ponte delle Grazie.

I owe a great deal of Signora Yoko, widow of Signor Hidetoshi Hoshino who was Professor at Bologna University and an eminent scholar of the economic history of the late medieval Italy. Signora Hoshino living and working at Florence for long time was so kind to arrange "a room without a view" for me and to aid my stay there all the way.

While trying to write this essay, I received news of the death of Professor Pietro Scoppola, my distinguished old teacher at the University of Rome. I would like to express my sincere condolences on his death and to dedicate this brief and awkward essay to him retrospectively on his sober personality, exceptional intelligence and tireless activity as a Christian Democrat or as a matured and enlightened Catholic.

References

- Accademia delle Arti del Disegno (a cura di), *Maria Grazia Martelli Bianchi. Pittura e Grafica Firenze 1899-1984*, Firenze, Morgana, 1993.
- Ernesto Balducci, *Giorgio La Pira*, Firenze, Edizioni Cultura della Pace, 1986.
- Pietro Bargellini, *Com'era Firenze 100 anni fa*, Firenze, Bonechi, 1998.
- Orazio Barbieri, *Ponti sull'Arno. La Resistenza a Firenze*, Roma, Riuniti, 1964.
- Stefano Beccastrini, *Vista Nova. Il Cinema in Toscana, la Toscana nel Cinema*, Firenze, Aska, 2002.
- Michael P. Carroll, *Veiled Threats. The Logic of Popular Catholicism in Italy*, Baltimore, The Johns Hopkins University Press, 1996.
- Sally Comelison Jr., "A French king and a magic ring: the Girolami and a relic of St. Zenobius in Renaissance," *Renaissance Quarterly*, n.55 (2002), pp.434-469.
- Edgar M. Forster, *A Room with a View*, London, Penguin, 2000.
- Id., *Two Cheers for Democracy*, San Diego, Harcourt Brace, 1979.
- Hidetoshi Hoshino, *L'arte della lana in Firenze nel basso Medioevo. Il commercio della lana e il mercato dei panni fiorentini nei secoli VIII-XV*, Firenze, Olschki, 1980.

- Arturo Carlo Jemolo, *Chiesa e Stato in Italia negli ultimi cento anni*, Torino, Einaudi, 1963.
- Primo Levi, *Se non ora, quando?* Torino, Einaudi, 1982.
- Dacia Maraini, *La nave per Kōbe. Diari giapponesi di mia madre*, Milano, Rizzoli, 2001.
- Eugenio Montale, *Tutte le poesie*, Milano, Mondadori, 1984.
- Salvatore Quasimodo, *Tutte le poesie*, Milano, Mondadori, 1995.
- Arrigo Petacco, *Pavolini. L'ultima raffica di Salò*, Milano, Mondadori, 1982.
- Angelo Rinaldi e Massimo Vincenti, *La Repubblica 1976-2006. Il libro dei trent'anni*, Roma, La Repubblica, 2006.
- Pietro Scoppola, *Crisi modernista e rinnovamento cattolico*, Bologna, Il Mulino, 1961.
- Id., *Coscienza religiosa e democrazia nell'Italia contemporanea*, Bologna, Il Mulino, 1966.
- Id.(a cura di), *Chiesa e Stato nella storia d'Italia*, Bari, Laterza, 1967.
- Stuart J.Woolf, "La storia politica e sociale", *Storia d'Italia*, (Vol.III, Dal primo Settecent all'Unità), Torino, Einaudi, 1973, pp.4-508.

(なお訳文はすべて筆者によるものである)。